

平成 15(2003)年 7月～12月 **長期漁況海況予報** 平成 15(2003)年 7月発行

大分県海洋水産研究センター 879-2602 大分県南海部郡上浦町大字津井浦

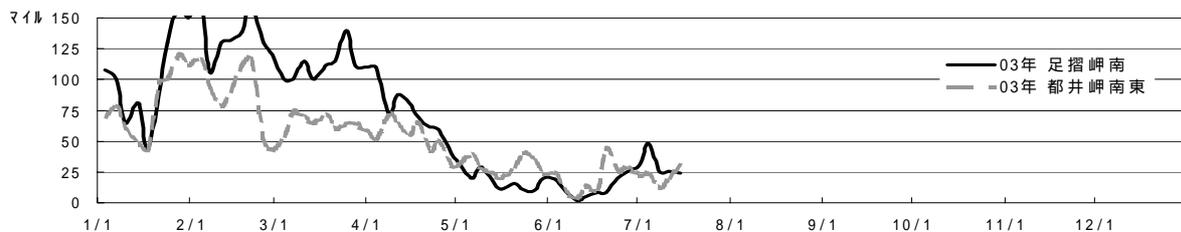
Phone0972-32-2155 Fax.0972-32-2156 <http://www.mfs.pref.oita.jp>

海況経過<平成 15 年前期>

黒潮

平成 14 年 12 月上旬九州南東沖に小蛇行が形成され、12 月中旬～下旬九州東沖で発達した後、15 年 1 月には九州東沖で停滞しました。2 月上旬～中旬この小蛇行は九州南東沖で東方へ大きく発達し、2 月下旬小蛇行の東端が室戸岬沖へ到達しました。3 月に九州東岸～四国沖の規模の大きな小蛇行は東進を始め、4 月上旬に一部が、4 月下旬に本体が、そして 5 月中旬に残りの部分が潮岬沖を超え、東へ移動しました。

黒潮北縁と都井岬及び足摺岬との距離の状況は、いずれも 4 月下旬までは離岸が継続し、以後、離接岸を繰り返しました(図 1)。



足摺岬：接岸 0～25 マイル やや離岸 25～45 マイル 都井岬：接岸 0～30 マイル やや離岸 30～50 マイル

図 1 足摺岬南及び都井岬南東方向の黒潮北縁までの距離(南西東海沿岸海況速報による)

水温

豊後水道の水温(0m、10m、20m、30m、50m及び75m層)は、「きわめて高め」～「低め」でした(表 1)。大分県側の海域を北部(沿岸定線Sta. 1-9)、中部(同Sta. 10-16)及び南部(同Sta. 17-22)に分けると、北部では1-5月は「平年並」、6月は「きわめて高め」の傾向となりました。中部では1-5月は「平年並」、6月は「高め」の傾向となりました。南部では1-3月は「平年並」、4月は「平年並」～「低め」、5月は「やや低め」、6月は「きわめて高め」の傾向となりました。

伊予灘と別府湾の水温(0m、10m、20m、30m 及び50m層)は、「高め」～「低め」でした(表 2)。伊予灘では5月が「やや低め」となった他は、期間を通して「平年並」の傾向となりました。別府湾では1-2月は「やや高め」、3月は「高め」、4-5月は「平年並」～「やや低め」、6月は「平年並」の傾向となりました。

塩分

豊後水道の塩分は、「高め」～「低め」でした。北部では1月は「高め」、2-3月は「やや高め」、4-6月は「平年並」の傾向となりました。中部では1月・3月は「やや高め」、2月・4-6月は「平年並」の傾向となりました。南部では1月・3月は「やや高め」、2月・5-6月は「平年並」、4月は「平年並」～「低め」の傾向となりました。

伊予灘と別府湾の塩分は、「きわめて高め」～「平年並」でした。両海域とも期間を通して高め基調が強くと、特に、

伊予灘2月は「きわめて高め」の傾向となりました。

表1 水温の平年偏差評価（豊後水道 2003年）

		1月	2月	3月	4月	5月	6月
(北部)	0m	- +	- +	- +	- +	- +	++
	10m	+ -	+ -	- +	- +	- +	+++
	20m	+ -	+ -	- +	- +	- +	+++
	30m	- +	+ -	- +	- +	- +	+++
	50m	- +	+ -	+ -	- +	- +	+++
	75m	- +	- +	-	-	-	+++
(中部)	0m	- +	- +	- +	- +	- +	+
	10m	- +	- +	- +	- +	- +	++
	20m	- +	- +	- +	- +	- +	++
	30m	- +	- +	- +	- +	- +	++
	50m	- +	- +	- +	+ -	- +	+++
	75m	- +	- +	-	+ -	-	++
(南部)	0m	+ -	+ -	- +	- -	-	+
	10m	+ -	- +	- +	- -	-	++
	20m	+ -	- +	- +	-	-	+++
	30m	+ -	- +	- +	-	-	+++
	50m	+ -	+ -	+ -	- +	-	+++
	75m	- +	- +	+ -	- +	-	+++

表2 水温の平年偏差評価（伊予灘・別府湾 2003年）

		1月	2月	3月	4月	5月	6月
(伊予灘)	0m	- +	+ -	- +	-	-	- +
	10m	- +	+ -	+ -	- +	-	- +
	20m	- +	+ -	+ -	- +	-	+ -
	30m	- +	+ -	+ -	- +	-	+ -
	50m	- -	- +	+ -	-	-	+ -
(別府湾)	0m	+ -	+	+	-	+ -	-
	10m	+	+	++	- +	-	- +
	20m	+	+	++	- +	-	- +
	30m	+	+	++	-	- +	- +

注) +++:きわめて高め ++:高め +:やや高め +-:高めの平年並
 -+:低めの平年並 -:やや低め --:低め ---:きわめて低め

海況の見通し<平成15年後期>

黒潮

9月前半に九州南東沖で小蛇行が形成され、9月後半～10月に四国沖を東進しますが、その離岸の規模は小さいでしょう。黒潮の小蛇行等の東進に伴って、沿岸域へ一時的に暖水が波及することがあるでしょう。

水温

「平年並」～「やや高め」でしょう。

予測の根拠

中央水産研究所及び関係府県:平成15年度第1回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報会議資料(2003)

気象庁気候・海洋気象部:平成15年夏季の北西太平洋の海面水温予報(2003)

神戸海洋気象台:平成15年夏季の南日本海区の海面水温予報(2003)

福岡管区気象台:九州北部地方3か月予報(2003)

資源状況と漁況経過 <平成 15 年前期>

マイワシ

昨年までの経過

大分県漁協鶴見、米水津及び蒲江支店のまき網(特にことわりのない限り、まき網についての数値は、この3支店に関するもの)によるマイワシの漁獲量は、1986年以降の1990年までの間は、年間30,000トン前後あり、その大半は3月から7月に漁獲される体長15cm以上の「中羽」以上でした。1991年以降、「中羽」以上は減少傾向となり、一方、7月から9月に主に漁獲される体長10cm前後の「小羽」も、1993年に、一旦、増加しましたが、その後は低調に推移しました。全銘柄の漁獲量は1998年まで8年連続で減少し、1999年は前年に比べ僅かながら増加しましたが、2000年は再び減少しました。そして、2001年は1月下旬から2月中旬にかけてまとまった漁獲があり、約1,750トンと5年ぶりに1,000トンの水準を超えましたが、2002年は大低迷し、約1トンと過去最低値を記録しました(図2)。

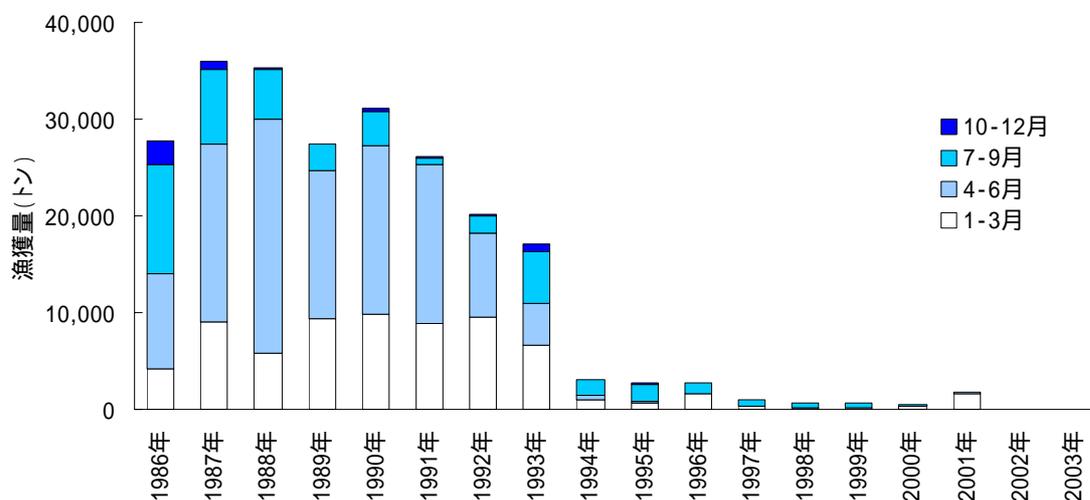


図2 マイワシのまき網漁獲量 (鶴見・米水津・蒲江支店)

本年の経過

2003年前半の月別漁獲量は、1～3月はほとんど漁獲がなく、4～6月は8トンで平年比は1%に満たず、著しい不漁が継続しました(以下、まき網の平年値を1986～2002年の平均漁獲量とする)。

カタクチイワシ(成魚)

昨年までの経過

まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、これまで一年毎に増加と減少を繰り返しており、漁獲の多い年(偶数年)で2,000～3,000トン程度、漁獲の少ない年(奇数年)で1,000トン前後の漁獲となっていました。しかしながら、1999年には1月中旬から7月中旬にかけて豊漁が続き、過去最高の漁獲となりました。平年の漁期は6月から9月までが中心であり、1999年は漁獲量及び漁期とも特異的な年となりました。そして、2000年は約2,100トン、2001年は約2,800トンと比較的高水準となりましたが、2002年は約1500トンと減少しました(図3)。

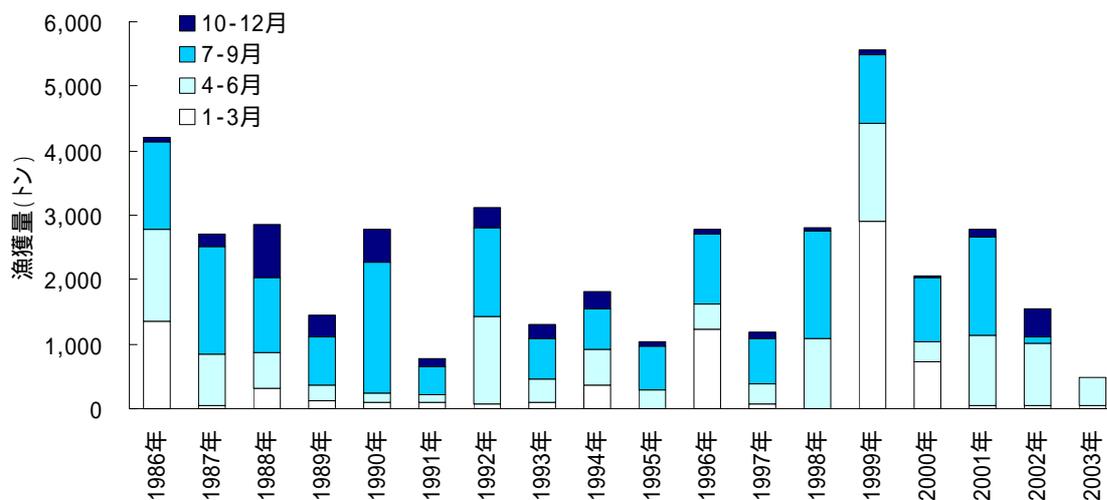


図3 カタクチイワシのまき網漁獲量 (鶴見・米水津・蒲江支店)

本年の経過

2003年前半の月別漁獲量は、各月9～244トン、平年比7～60%となりました。このうち、1～3月は39トン、平年比9%と低迷し、4～6月は354トン、平年比52%となりました。

カタクチイワシ(シラス)

昨年までの経過

佐伯湾(佐伯・鶴見)の船曳網によるシラスの漁獲量は、1992年に約530トンの最高値を記録した後は、減少傾向となり、1995年には200トンを割り込みましたが、その後は、1993年以前の水準には及ばないものの増加傾向を示しました。しかしながら、2001年は約160トンと過去最低の漁獲となり、2002年は約210トンの低水準となりました。

別府湾(杵築・日出)では、1990年以降1,200～2,200トンの範囲で変動しましたが、1998年の漁獲量は、1990年以降初めて1,000トンを割り、約750トンと最低値を記録しました。そして、1999年以降は再び1,000トンを超える水準となりましたが、減少傾向を示し、2002年は約870トンと再び1,000トンを割り込みました。

臼杵・津久見湾では、1991年以降0～106トンの範囲で大きく変動しており、2002年は15トンで、平年比46%となりました(以下、船曳網の平年値を1991～2002年の平均漁獲量とする)。

(推計方法:別府湾の漁獲量 = 製品(ちりめん)重量×2.514、豊後水道の漁獲量 = 製品(ちりめん)重量×2.380)

本年の経過

2003年前半の月別漁獲量は、佐伯湾では1～3月は0.1トン、平年比0%とほとんど漁獲がなく、4～6月は106トン、平年比116%と好調に転じました。

別府湾では1～3月は60トン、平年比47%と低調で、4～6月は377トン、平年比116%と好調に転じました。

臼杵・津久見湾では1～3月は0.3トン、平年比21%と低調で、4～6月は漁獲がありませんでした。

ウルメイワシ

昨年までの経過

まき網によるウルメイワシの漁獲量は、1986年以降100～300トン程度でしたが、1992年以降は増加傾向を示し、1996年には約2,300トンまで達しました。しかしながら、1997年以降は減少傾向に転じました。そして、2001年は約1,040トンと、3年ぶりに1,000トンを超える水準となりましたが、2002年は大低迷し、約35トンと過去最低値を記録しました。漁獲は夏期の6～8月が中心でしたが、近年は冬の1～3月にもまとまった漁獲がみられました(図4)。

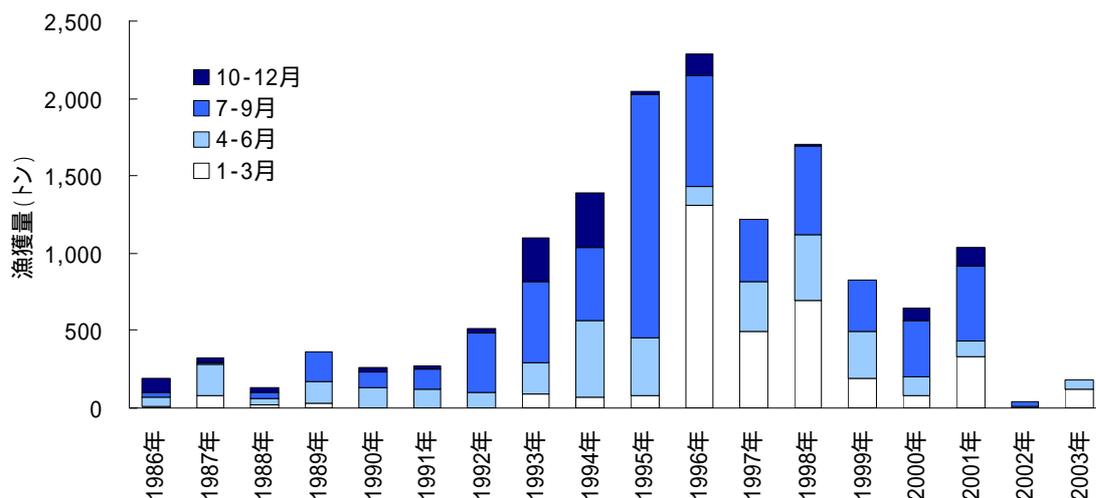


図4 ウルメイワシのまき網漁獲量(鶴見・米水津・蒲江支店)

本年の経過

2003年前半の月別漁獲量は、各月0～69トン、平年比0～84%となりました。このうち、1～3月は124トン、平年比60%、4～6月は42トン、平年比22%となりました。1月は一昨年12月以降の大低迷が続いていましたが、2～4月は平年を下回るものの比較的まとまった漁獲となり、5月以降は再び平年を大きく下回りました。

マアジ

昨年までの経過

まき網によるマアジの漁獲量は、1986年以降減少傾向を示し、1991年に1,000トンを割り込みましたが、1992年以降は増加傾向に転じており、1998年には約7,500トンの漁獲量で、過去最高値を記録しました。しかしながら、1999年以降は2,000～4,000トン程度の水準に下がり、2001年は年前半の不漁により約2,270トン、2002年は約3,800トンとなりました(図5)。

また、佐賀関支店の釣りを中心とするマアジの漁獲量は、1988年以降増加傾向が継続し、1999年には248トンに達し、過去最高値を記録しました。しかしながら、2000年は一転して170トン(平年比83%)と落ち込みました。そして、2001年は196トン(平年比96%)、2002年は210トン(平年比102%)と、それぞれ前年を上回る漁獲となりました。(以下、佐賀関支店の平年値を1988～2002年の平均漁獲量とする)。

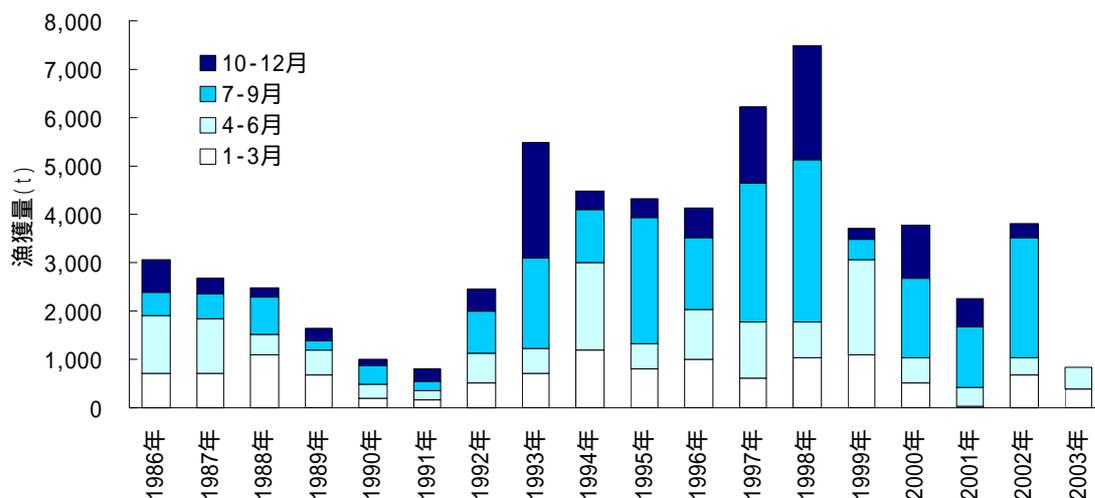


図5 マアジのまき網漁獲量（鶴見・米水津・蒲江支店）

本年の経過

まき網の2003年前半の月別漁獲量は、各月48～226トン、平年比16～85%となりました。このうち、1～3月は374トン、平年比54%、4～6月は416トン、平年比53%と低調でした。

佐賀関支店の月別漁獲量は、1～3月が63トン（平年比125%）と好調でしたが、4～6月は39トン（平年比69%）と平年を下回りました。

マサバ・ゴマサバ

昨年までの経過

まき網による「さば類（マサバ・ゴマサバ）」の漁獲量は、1993年以降増加傾向を示し、1996年及び1997年には、それぞれ約14,000トンと約12,000トンをあげて豊漁となりました。しかしながら、1998年は一転して不漁となり、1986年以降初めて1,000トンを割り込みました。そして、1999年、2000年と低水準ながら増加傾向を示しましたが、2001年からは大低迷し、2002年は約180トンと過去最低値を記録しました（図6）。

「さば類」のうち、1994年以降はゴマサバが漁獲主体で、マサバの漁獲はほとんどない状況でしたが、大低迷した2001年及び2002年にはマサバの占める割合が比較的高い傾向がみられました。

また、佐賀関支店の釣りを中心とするマサバの漁獲量は、豊漁であった1992年と1993年を除き、ほぼ100～200トンの範囲で変動しました。1998年以降は120トン前後で横ばい傾向となり、2002年は148トン（平年比93%）と、平年を下回りました。また、2～3年の短い周期で増減を繰り返す変動傾向もみられました。

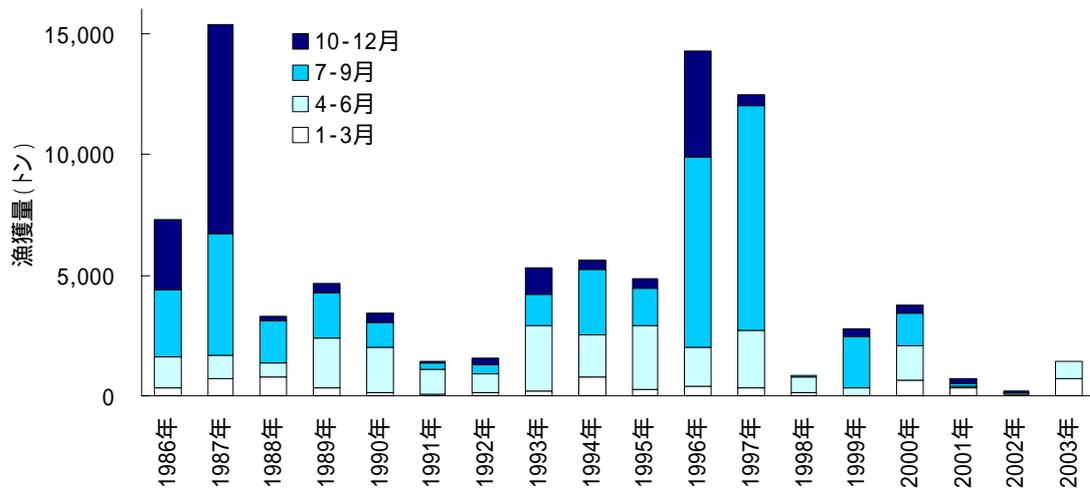


図6 マサバ・ゴマサバのまき網漁獲量（鶴見・米水津・蒲江支店）

本年の経過

まき網のゴマサバを主体とする2003年前半の月別漁獲量は、各月15～489トン、平年比5～492%となりました。このうち、1～3月は718トン、平年比219%と平年を大きく上回り、4～6月は651トン、平年比50%と低調でした。1月まではこれまでの不漁が継続していましたが、2～4月は豊漁に転じ、5月以降は再び平年を下回りました。

佐賀関支店のマサバの月別漁獲量は、1～3月が117トン（平年比146%）と好調でしたが、4～6月は3トン（平年比14%）と平年を大きく下回りました。

漁況の見通し<平成 15 年後期>

マイワシ

【太平洋系(北薩 - 熊野灘)の見通し】

来遊量は北薩、紀伊水道外域西部では低水準の前年並みか前年を下回るでしょう。日向灘、**豊後水道**、土佐湾及び紀伊水道外域東部～枯木灘では低水準の前年並みか前年を上回るでしょう。熊野灘は低水準の前年を下回るでしょう。



[説明]資源量は 1995 年から 1999 年までは低水準ながら比較的安定していましたが、2001 年から減少傾向が顕著となり、2002 年はさらに減少したと推定されます。2001 年級群の残存資源量は少ないと考えられます。2002 年級群の残存量はそれほど多くないと考えられるものの、沖合にはある程度の魚群分布が認められます。2003 年級群の資源豊度はあまり高くないと考えられますが、来遊量水準については現段階では判断できません。

【大分県の見通し】

漁獲量は比較的大きな周期で増加あるいは減少すると考えられ、来遊水準は直前の漁獲水準と相関が高い傾向にあります。漁況経過からみると、来遊水準は極めて低いままであり、依然として低水準でしょう。但し、過去最低値を記録した前年は上回るでしょう。

カタクチイワシ(成魚・シラス)

【太平洋系(北薩～紀伊水道外域西部の成魚)の見通し】

来遊量は**全般**に低調の前年を上回るでしょう。紀伊水道外域西部は前年を下回るでしょう。



【太平洋系(西薩～常磐南部のシラス)の見通し】

来遊量は西薩、志布志湾、日向灘、**豊後水道**では前年を上回るでしょう。土佐湾～紀伊水道外域では前年並みか前年を下回るでしょう。紀伊水道では前年を下回るでしょう。伊勢湾、渥美外海、遠州灘では前年を上回るでしょう。駿河湾では前年並みでしょう。相模湾、常磐南部では前年を下回るでしょう。

[説明]資源水準は高位で、横ばい傾向にあると考えられます。2001 年級群の豊度は高いが、残存漁は少ないと推定されます。2002 年級群の豊度は 2001 年級群並みに高いと推定されます。2003 年級群は前年より 1 か月早い 3 月から産卵が本格化していることから、高水準の加入が期待されますが、今漁期の漁場への出現については注視する必要があります。

【大分県の見通し】

成魚については、漁況経過からみると、本年に入り平年を下回る漁獲が継続しており、来遊水準は低いと考えられますが、5 月以降はやや回復傾向にあり、小サイズ(じゃみ等)にまとまった漁獲もみられることから、全体としては、過去最低値を記録した前年は上回るが、平年は下回るでしょう。

また、シラスについては、漁況経過からみると、来遊水準は佐伯湾、別府湾ともに増加傾向にあると考えられ、前年を上回り、平年並みでしょう。

ウルメイワシ



【太平洋系(北薩 - 熊野灘)の見通し】

来遊量は北薩、土佐湾、紀伊水道外域西部は前年を下回るでしょう。日向灘、豊後水道東部は前年並みか前年を下回るでしょう。豊後水道西部、紀伊水道外域東部は低調の前年を上回るでしょう。熊野灘は低調の前年並みでしょう。

【説明】資源量の指標となる産卵量は2001年、2002年と減少しました。資源水準は中位で、やや減少傾向にあると考えられます。

【大分県の見通し】

漁況経過からみると、来遊水準は一昨年12月以降の著しい減少からやや回復の兆しが伺えますが、依然として低い状態にあると考えられます。また、当該時期の漁獲量は当年3～6月のCPUEと比較的高い相関($r=0.66$)があり、これから推定すると約448トン(前年比2035%、平年比100%)の漁獲となります。従って、総合的に判断すると、過去最低値を記録した前年は上回るが、平年は下回るでしょう。



マアジ

【太平洋系(薩南 - 日向灘・豊後水道)の見通し】

来遊量は0歳魚は薩南、日向灘、豊後水道東部海域では前年並みか前年を上回るが、豊後水道西部海域、宿毛湾では前年を下回るでしょう。1歳魚は豊後水道東部海域では前年を上回るが、その他の海域では前年を下回るでしょう。

【説明】資源量は1990年代に入り良好な加入に支えられて高水準で推移してきましたが、1997年以降、加入の減少とともに3年連続して減少しました。2001年には良好な加入により、資源は高水準に転じましたが、2002年は加入量の減少により、漁獲量、資源量ともに減少しました。2002年級群は2001年級群を下回る加入水準と推定されます。2003年級群の来遊水準は、近年では水準の高かった2001年級群を大きく下回るが、前年を上回ると考えられます。沿岸域への暖水波及とマアジの来遊には関係がみられ、暖水波及の頻度が低下すると来遊水準が低下する可能性があります。

【大分県の見通し】

漁況経過からみると、来遊水準は低いと考えられ、漁獲主体となる0歳魚の5～6月加入も低調なため、前年、平年をともに下回るでしょう。

但し、当該時期の漁獲量は前々年0歳魚の推定漁獲尾数と比較的高い相関($r=0.69$)があり、これから推定すると約3,648トンの漁獲(前年比132%、平年比179%)となります。

また、豊後水道東部海域では4～6月期の0歳魚は過去5年間で最高の水揚げとなっていることから、海洋条件が整えば、本県海域においても好漁場が形成される可能性があります。

マサバ・ゴマサバ



【太平洋系(薩南・日向灘・豊後水道)の見通し】

来遊量はゴマサバ0、1歳魚は少なかった前年を大きく上回るでしょう。2歳以上は前年並みか前年を上回るでしょう。マサバは低水準でしょう。さば類全体としては、前年を上回るでしょう。

【説明】ゴマサバの資源量は近年では1996年級群が卓越年級群であり、1999年級群の豊度が次いで高いと推定されます。2000年級群、2001年級群及び2002年級群の加入量は比較的安定しており、太平洋側全体としては、1999年級群より低いですが、豊度が低かった1997年、1998年と比べてかなり高いと言えます。この中で2001年級群は2000年級群と2002年級群にやや及ばず、2002年級群の豊度が最も高いと考えられます。2003年級群の加入量も比較的多いと推定されます。また、マサバの資源水準は低位で、減少傾向にあると考えられます。

【大分県の見通し】

漁況経過からみると、来遊水準はここ2年間の著しい減少から、2月以降、ゴマサバを主体に回復・増加傾向に転じていると考えられるものの、5月以降の水準は低いままであることから、不漁の前年は上回るが、平年は下回るでしょう(ゴマサバ主体)。

その他

予測の根拠

中央水産研究所及び関係府県：平成15年度第1回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報会議資料(2003)

問い合わせ先

この予報に関する問い合わせ先は、大分県海洋水産研究センター 企画・海洋資源利用部まで
(〒879-2602 大分県南海部郡上浦町大字津井浦 電話0972-32-2155 ファクシミリ0972-32-2156 e-mail:
a16411@pref.oita.lg.jp)